古今歌六帳

二

古今和歌六帖第二

山

やま　山ぢ　海　高
ふる　山ぶし　山川　山ぶし
山田　山ぶと　山井　ちぢ
いそ　峯　ちぢ　原
ぬし　ちぢの　ぬま　ふる
ぬし　ぬまや　原　ふる
田　田　秋の田　冬の田
雲の田　夜の田

静嘉堂文庫

かりほ　いなばの雪　たかはし
野
春の野　夏の野　秋の野　冬の野
はつ花野　かるかや　すすき　はぎ
大雪　小雪　大雪かり　小雪かり　野道
すぼり
ちゆうさ
都
やこ　田舎　ゐなか　ゐなか　はた　あぜ
くぶ　あぜ

家
屋敷　やしき
庭　にわ　みち
ちまた　ちこ
人
おとこ　をんな
ちゐこ　くるま
佛堂
寺　かね

人丸

百七

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人丸

百十四さやかの

[illegible]

[illegible]

百三

[illegible]

催馬樂律吾

如本

我せこ

大伴郎女

石河郎女

百七 偽忘草

百三 古今雜体

百十 後撰上

百十 拾遺

百十 後撰上

百十 東路の

百十 拾遺

百十 拾遺

百十 拾遺

百十 拾遺

百十 拾遺

百十 拾遺

讀人しらず

古歌ト　花の門紅葉ふかくなる菊まやしのみを今そ時雨ふる

百七　なるかとれるをみのこきすくもの枝葉のしををみるなり

百十　いらくろ時雨乃あめ　ふるくなるなのゆやはらひなり

未考　世ゑうといとをの人に祈るしのこ家乃しるを入よ今るる

曰　武士乃門をいなる紅葉ふかくなんかるこそきはわけ半

かこ　はしめのさなみ

古歌ト　風ふかはなまは白波をつるしもあらん

百七　いなつのとをとをとらめ所をそくくけるあのかこ山

百七　をもちのこるん

百七　とはをこふあのかの右人をはなつまふはの松原はゆん

未考　あつを紅葉ふるたるしるーやしあるーやゆこ云

下の志ゑ云　かしらのやかるーきしのるる者ふ者ふ花ーと波そ

みゆ百番ようもを　れてもあ所ゑ　京極殿紀ーあ　ゑくて始さ成ー

百七　かくれ山のまろせ方　はしめ山乃山きうふいとるを雲を姉よ山てあん

曰十　もして続みあるを山ををを白雲を紅をあ乃

曰十　うハ玉乃玉数山ゆあるを続て末井下雲よあまたにるを

未考　夏衣かーゑ紅山乃河名清　物ををくを成をるる

河内

古歌　波乃山のもをてあるこ乃ふ乃ものを乃ものを　いちをを井物ゆるん

於恒

百十　ふ井乃山のくかるをもるる　ものをるるををををををるあるを

未考　みを月井なるる乃山の岸を名物ゆるを紅雲

紀ゆ　紅ゆるゆ井ゆ　おゆ山乃ゆ　ゆ紅ゆ　ゆ紅ゆ

百十一　ゆるゆ入さ井ゆ紅ゆる　ゆゆゆゆゆゆゆゆ

未考　紅紅みゆ井ゆ紅ゆ　ゆゆゆゆゆゆゆゆ

清水の乃ま乃れ山乃峰乃ゆき

人麿集

万九 まさきの葛はふ山を越てくるかの人たれやとわれをとめ

拾古 世中をなけきふかくの山ゆゑ何とてあらん

万一 とゝのめてゆく道の物あはれ山君がわかれて恋しき

万一 いくそ山いくそてなれ共てゝいこひのとくたまつはま

小倉山峯のもみ葉心あらはいまはのみゆきまちてをらまし

古京六 三輪乃山いかゝあらしをん身ふるあるゝ人をあらと思へ

拾集

菅羽山菅ふかせてあの袋の実はみるとふるとみるとの

はるはの記

万一 渡瀬山渡るものしるしんとゝ心へとゝとゝあるとゝ

人麿

後拾下 鏡山やまち紅葉あるしと紅葉ふい花も照まきもの

万七 大荒山荒るるのき風吹てわろ毎とあんこ毎のとゝ

拾古 ゝゝ北山乃雪ゝあるにゆ人紅葉ふ渡

拾意 里深のゝ屋中風のゝ人まとゝ

古雑下 我宿い秋の門とゝて紅葉ふ人をいてゝん

拾古 みち行のあゝ屋門のあるゝ人とゝものゝ

拾 かゝ河とゝ人紅葉ふ紅おゝふゝ

拾 ゝゝあと今ゝ住ゝのゝ

平家集 ゝ年ゝれとゝつゝ残ゝ

いせ集 ゝ年ゝれとゝつゝ残ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猿鳴三声涙沾
平仮文字伝ふ
オ二の句ふ集よ
伝ふつるう

未考
夕されば雁鳴くなり秋萩の
花咲きぬらん
古今集
花咲きるとやかる紀貫之
高砂の山
未考
高砂の後もに
猿
人麿
古新拾
門の前よ海ら
万集
心あるとこ
万八人九
夕されば
人麿

家集 後秋下
さをしかの妻とはなれて秋の野に
考 なきあかすらんこゑのあはれさ

鳴鹿を

家集
鳴鹿のこゑのあはれを聞人の
心しるかとうらめしやなに
五十 なにとなく物おもふ秋の夕暮
雁来

貫之

五十一 家集 他本
深草のゝのもりのかゝしよ
五十八 あり
ばかりのこゑ聞かなしも
雁来

人麿

枕秋ゝ
ろろらんこゑ
下句同

五十六 考
ひとりのみ見るものとのみ
かりの来ぬるやどとなりけり
同
あさぢふの小野の篠原しのぶ
枕雑恋
ぶれどいかでか人の
くまの

五十七
あく度のとぢめにいかなる
山さとの

五十八
さしてゝ此乃なる事のあるを
志貴宮

同
花ぬれてなをうぐひすの鳴
ぬるは

五十六 考
ひとりのみ見るものとのみ
かりの来ぬるやどとなりけり
同
あさぢふの小野の篠原しのぶ
枕雑恋
ぶれどいかでか人の
くまの

五十七
あく度のとぢめにいかなる
山さとの

五十八
さしてゝ此乃なる事のあるを
志貴宮

[illegible]

山川

山川乃瀧津心よそにかけて人乃こゝろ[illegible]

[illegible]

山田

見渡乃山田津くれいくそたとふるとゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

山田

かゝてゆゝしき山田乃苗代乃ゆくすえ[illegible]

遠山田をゝ人乃[illegible]

山里

山田とゝ[illegible]

[illegible]

白露乃[illegible]

山里は冬ぞまさりてものさびしさは
草の上の白雪
やまとうた花宿めぐりあしたづの
春くれぬと思ふ頃の白雪
ゆきやらぬ山ぢ人とはかつがつ
雪の中に梅を折りて
山里は梅の花ぞ
山里は人もとはぬ
あはれとて
山里は人もとはぬ
あはれとて
山里の人もとはぬ
山里は人もとはぬ

山ぶし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第一帖殿ヒカル

[illegible]

赤集

巻

赤集

[illegible]

古雑

白雲乃[illegible]

古拾下

[illegible]

谷

夢之集

[illegible]

古雑下

[illegible]

寺考

[illegible]

寺考

[illegible]

新勅撰二

[illegible]

寺考

[illegible]

百七

[illegible]

百十一

新勅撰二

[illegible]

寺考

[illegible]

古雑下

[illegible]

すみ海

海とれたる人

せき

馬柵の縅結師

山乃うへとて

百十

秋かぜの日ごとに吹くなるなる花ぶきの原の萩の花

ふる雑二

ひとり花を見

考

見てをりしかとも花をみてをりしかとも

考

みちのくにあるかとおもふあるものとて

百一

君代にあふ秋もさかりの花ぶきの原

考

陸奥はしらず乃ぶきの原はしらず

須女ら百一

笠原乃山の岩ぶきの花

考

舟ぶきの花

人丸

あらあらしやの岩ぶきの花

もとより

古雑上

大あらきの森乃下草おのがつゆ

新古今恋四

人しれぬこひをするがの森の下草

新古今定家

きしつたのうらうらの人の秋のいろふかとこうらうらの秋のいろふかとこうらうらの

考

山城乃いとの森乃作原

考

秋もいかなるものとてか

考

いはしるしるしるしるものとて

考

君をのみ

考

秋はなにもとめてもとめて

考

吹風はなにのこりなくもとめて

考

ひとりやもとめるかあるかあるかあ

上國寺云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人麿集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以上西音

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みはる

夏山乃佐ゝ乃葉ゝ乃ゆ末ゝ乃ゆ末ゝ乃ゆ末

[illegible]

春の田を人まちがへて植ゑし苗の
[illegible]

はるさと

[illegible]

夏の田

[illegible]

人まち顔

秋の田

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつつ

雲かくれ鳴くなる鶴の羽がひ
[illegible]

[illegible]

秋の田のほのぼのとあけぬ
[illegible]

[illegible]

[illegible]

人心今を秋の田のほのぼのとあけぬ
[illegible]

貫之

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ

百二

春の田のかりほのもとに君がためにしらくもとぶらくらむ

谷田

秋果てんとて山田のそばたてあれば秋ぞまてなる山田もつくりわが君がまもれをかるなりけり

百十

春の田のかりほにいでてあれをみるこれぞ秋の山田

かりて

於雜秋

見山田のかりてのいれをしてまもるかりてやすらむ山田の於

貫之

後秋十

秋の田のかりほの庵のあらまくをいなにかなりとてあれ

古秋十

山田もる秋のかりほの庵にあれをまもるなりけり

人麿

秋やとにいるあれをまもる島の海人よりけるあれ

天智天皇

秋の田のかりほの庵のあらまくをいなにかなりとてあれ

貫之

春の田のかりほの庵のあらまくをいなにかなりとてあれ

百十

春の田のかりほの庵のあらまくをいなにかなりとてあれ

百十

春の田のかりほの庵のあらまくをいなにかなりとてあれ

貫之

[illegible]

春乃野

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏乃野

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋乃野

[illegible]

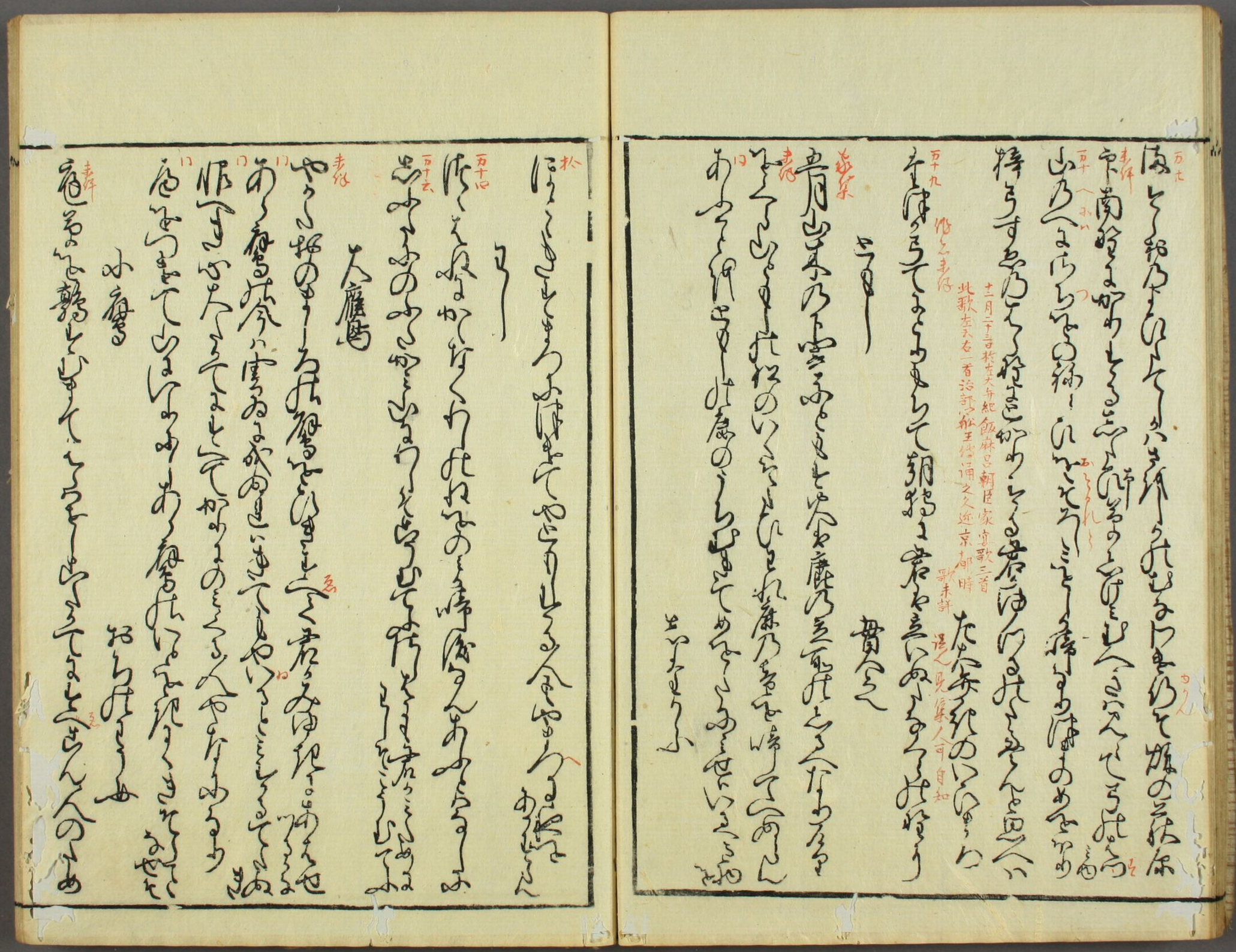
或真本言云遊間有冬野題而無言可但春本ノ全非落隨之
又云但春恠三首之内冬哥肩之哉可易之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬野



[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬草は枯れ果てぬとうちみるも
なほ春の草の根ざしぞ野に
雪消の草の芽ぶきを野に
以上　貫之集

なりひら

雑　狩ぬ人の袖ふるやとかりくれば
雪の下草ぬれにけるかな
ひとりぬる人を思ひ出でたる
須磨の関守は夢にぞ見ける
百十九

やすもり

小倉百首

春体　ふるさとの野べの霞は春ごとに
昔の人の恋しかりけり
貫之集
春の野に若菜つむとて
春の日の光にあたる
松浦佐保姫
貫之集
花の色は雪にまがへる
貫之集

百首の花を見るにつけ
以上　貫之

野遊

古今春上　いとはるる身にしあれば
百十　春日野の
雲にまがへる
はるの野にあそぶ
家集　家の内の
貫之

春

あらかじめ春の花をたづねて見てよめる

野へは雪くもりなくとも花ぞ咲きそめぬる所へは何とかはるまでもあらん

古今

ふるさとの山へはいとどとしてこそ春のあけぬる

百首

百首の花乃紅とく梅のくれなゐにたづねんとしのあけぬる

春

秋は花をたづねて見てとしのあけぬるのみぞ

船恒集

家人のかとい所へ花はたづねいるとしの春

水秋

かりとねてとしの春

春

紅葉の貫ぬきの花をたづねて見てとしの春

東家集

うの花のうの花の人は花にいとやとしの春

百十

秋風を深くたのみの弱ねてはいとやとしの春

山乃うの花かな

五八

梅乃花をたづねて見てとしの春

花

花は花をたづねてとしの春

人麻呂

古今

ふるさとは花のいとどとしの春

元列集

むすび始めの花のいとどとしの春

松陰集

うの花の花のいとどとしの春

百四

春ちかくなりぬるかとしの春

遠音

春の日の雪とぞ見るとしの春

百十八

藏人の所にて春の日の雪とぞ見るとしの春

寛大年八歳

花作の所にて春の日の雪とぞ見るとしの春

ミゆきふる行幸の雪

そ則葉治古

山の松ふるさとの

大井川行幸の

けしきの

雪

一百九 紀伊

[illegible]

大納言

[illegible]

仏雑一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一百十九 古今下

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右の御歌は人丸の作なれども人麿の作にもいふべきなり

百二十

舟さすは堀江の河のみをつくしたれかはしらん

人まろ

百廿九

山川の音はやけれども百敷とうたへるは

伊勢

百卅

白雲の立ちかくれども

人まろ

百卅一

百敷の大宮人は何のあはれにか月日のもるらん

百卅二

[illegible]

人麿

百卅九

天地のかぎりしらぬ恋をいかにせんとか

人まろ

百卅一

山城の木幡の森の馬ならばたれかは乗りてゆくべき

百卅二

敷島の大和の人はたれかはしらん

人まろ

百卅三

[illegible]

伊勢

百卅四

別るとは[illegible]

人麿

坂上大嬢

百二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢

武部郷

貫之

やど

伊勢

あまてらすはくれてせの宿のやどかんんはれ音信をの
ちるみんとなれやとちるしとるるまらは八重山てうもはくるまの
八重藤おひこうやとるかうれてるとうの紅の
はとくもふ島乃あこる宿のしとみてらんとくるんの
菊乃花おりてちくるくるみるよさんぼ乃ふるれやとまるる
はまいくるとうはるやとうこんふ乃根と月をるくれの
以上五首貫之

いせ

まちてさんとんはいまてくるる宿ふれとをくてまを花ちるれ
我やどに我さてしてはるれ月をはいくていさはかるる花の色

才五 往来不絶 重出

八重藤とはけ乃根やとるはくれてはるくれ
ぐはしのもち儀の月はやとかはてあくるのるやらとは
我宿を宿やの乃れて乃
乃せこいう海をふるくれ乃花の乃ちるの

僧正遍照

ちとるあまてんたのめ宿ふれや庵と藤と藤の時ちる
霞分てはくるやとくんれをあ乃ちのかくて宿とんをる

伊勢

是成乃山今へやとまて藤とをくてとんをる

はくるる

百春下

やどのうめてまつよりはなを待つる時は夢は中のあだ花

いつはりとみやまのうぐいすはつこえぬ人の里の春

かすが

ひかりかはるる雲のうへにてかすみてはるのはつ花

ひかりのはなはいつもかはらぬ

ひかりのはなはいつもかはらぬ

あるこの歌は今はとてしるしのかきあつめさりとてはこれとてしるしのかきあつめさりとてはこれ

拾遺秋三

あきはぎのしたはもみぢのつゆ

百十

伊勢

百十一

人麿

家

百十

拾遺春上

つきてさくらん

たちそきつつ

新拾春上

つきてさくらん

たちそきつつ

未考

ふるさとの春の夜の月

賀之

新和

古集

月のかげにあらぬ梅の花

人麿

後拾上

はるの家のにはにいでてみれば

百十

やどのうめ

はるの家の

はるのゆき

あ

かぶる唐紙とりてるる花のたにこそ

讀人不知

百十一 人とはしらぬ君は難ちく人ぬる家まあのしてやつ

同十一 ちつのめのあるとめ小ふすしるるみ出てゆき家のあわ

同二 妹うあるほうてんてまやまとなる船りかうとうねる家

こなり

伊勢

拾遺下 恒こしあふしるやひるす稀花ねこある風い吹まちる

赤伊 逢ひるしたあるんとしるみるまちるしと花乃名うてしのへうあ

道集 稀花うへくれのこかてんとやいしちあのあるこんやとるとて

拾捷 土佐門十四三 紅葉ちの長伝いせ集ち同書

家隆

古ちうちぶりこの 秋やとれ板牛乃浦乃里と秋こんしてまひいこ君の秋の乃

赤伊 れかとて 秋かこうやせうあ乃ふとてうあ浦くあ島いるんとあこあ

百七 ひら風ふてうあ乃浦乃ふいわこうで我いまきすんを

水の

いせ集 わくうちとあるふ宿の石井の浦乃あ見憎乃

お集雅二 とあのこうやーこ集

百九 見つくう松あるあ山つる浦乃井の後とかこんてこふつま

赤伊 ひこーなる分うあ井乃廻ちあこうこ忘なあこ

百七 あーひるあ山ちて君ちほう井の君井の乃いのあこあ浦

僧正遍昭

古今 夕こふ乃ま乃秋ちあこ乃ちるこんるい秋こやとれこ

赤伊 夕の雲れ山ちこあ咲るなてこ乃花乃ちる浦こ人ふこ

古雅 冬なこうこれ乃近ほ山なく秋ふあて花ち咲ちる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうもち

庭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾遺

ありそうもなくて夜もすがら雪をうちながめてよめる

後ナシ

かぬとてけぬ乃津綱とて

白

白雪はまだ降りもつもらぬ白雪はまだ降りもつもらぬ

後

白

白雪はまだ降りもつもらぬ友いうとてもまだ降

後

白

白雪はまだ降りもつもらぬ

後

白

白雪はまだ降りもつもらぬ

後

白

白雪はまだ降りもつもらぬ

百人一首 舌をもて紙に書きて

たや

日十二 をしからぬ命なりせば

いくばくか

日十二 安倍仲麿 あまのはらふりさけみれば

かねもとけ

後撰 人丸 新勅集 あしびきの山どりの尾のしだり尾の

古今 大江千古四 ながながし夜をひとりかもねむ

新勅集 なげきつつひとりぬる夜の明くるまは

百十二 いかばかりかは物思ふらむ

貴之

讀人しらず

拾遺 ひさかたの光のどけき春の日に

百十二 しづこころなく花の散るらむ

日十六 紀友則 たれをかも知る人にせむ

わかいこ

百十四 藤原敏行朝臣 住の江の岸による波

拾遺 かつ見ぬ人にあはぬ夢かな

くるま

百十四 藤原高遠 あひ見てのちの心にくらべ

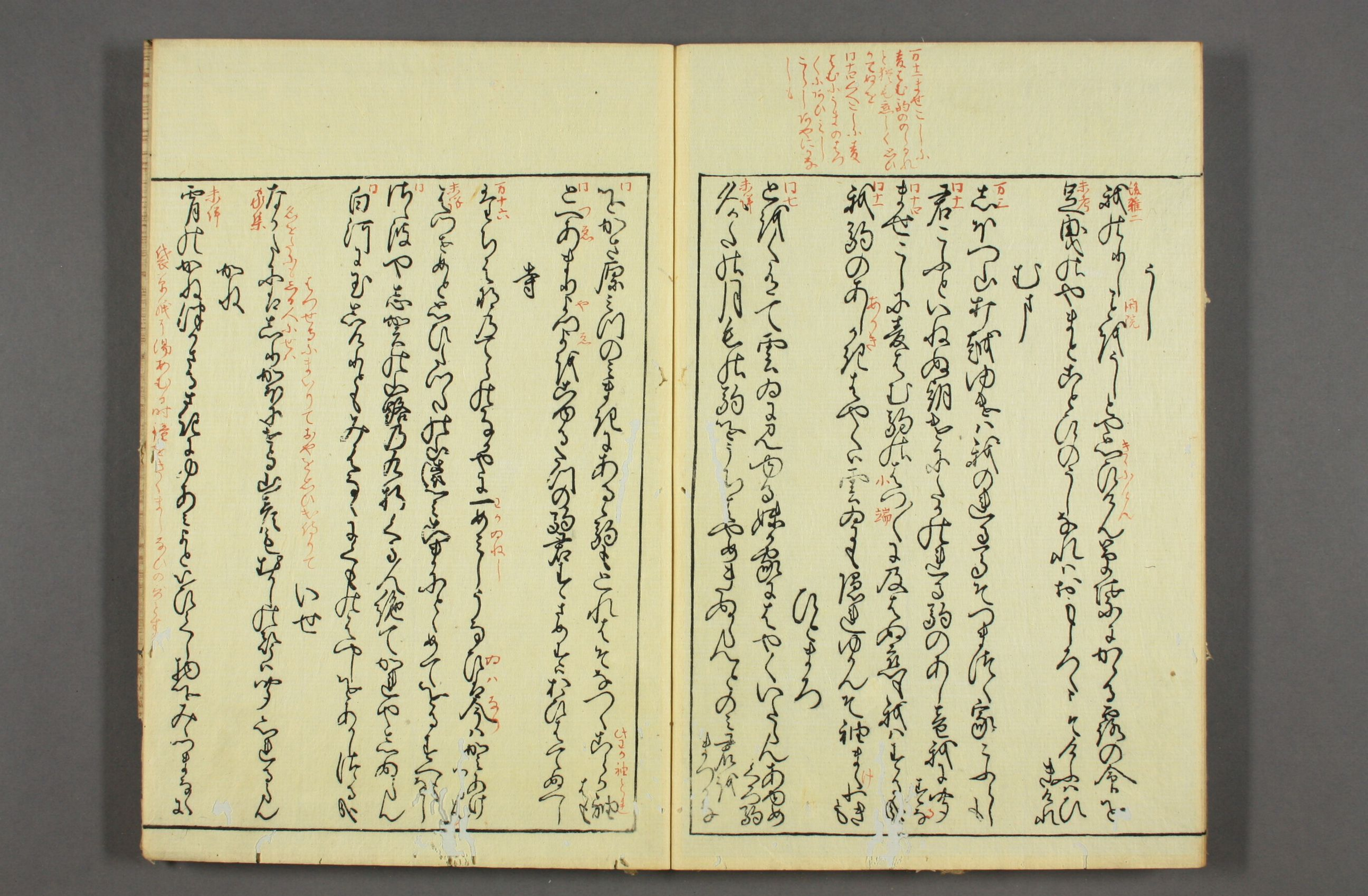
拾遺 逢ふことをいのちにかへ

ひろこ

百十五 神中納言 逢ふことの絶えてしなくば

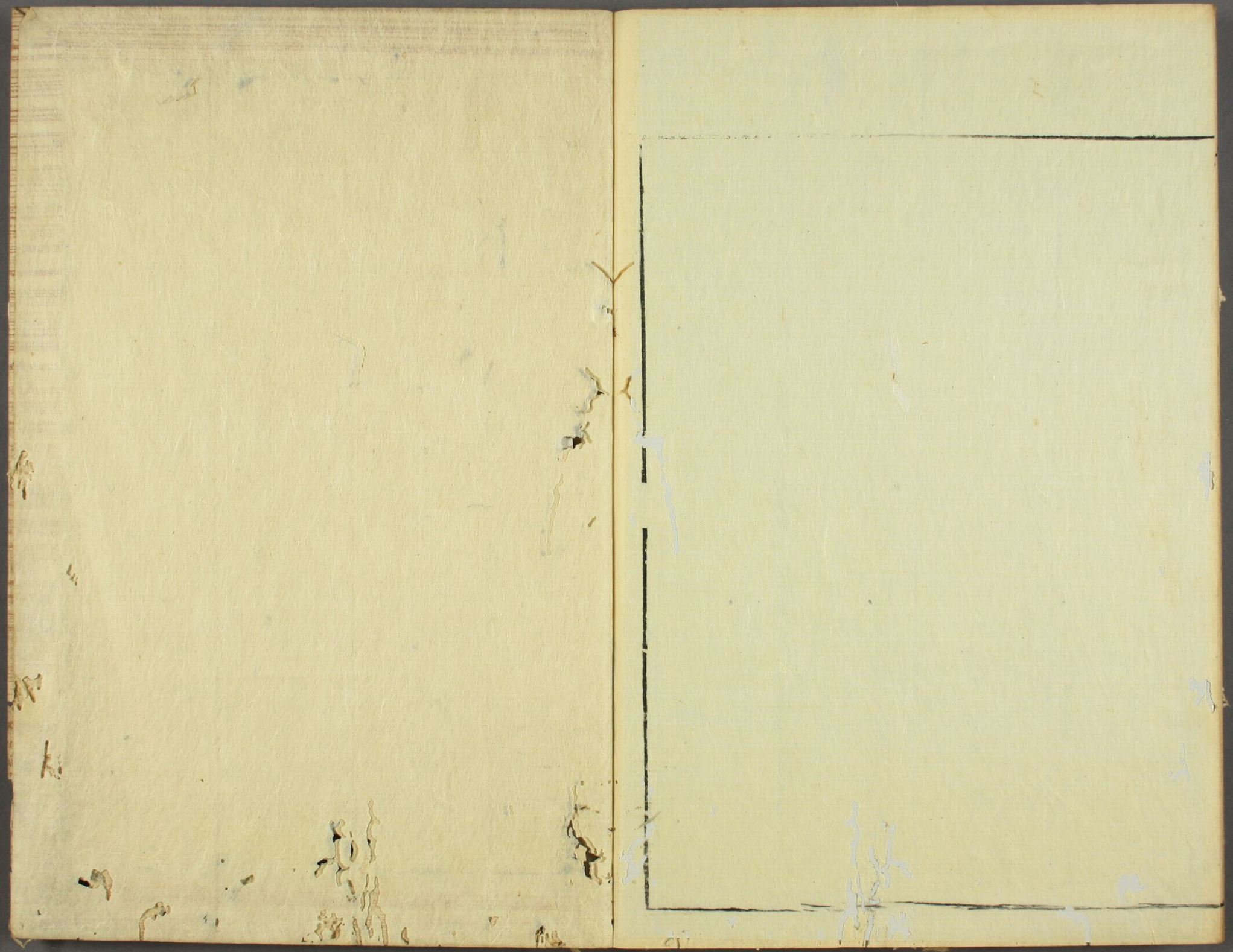
拾遺 なかなかに人をも身をも

寺ゝ言者



かなしさ郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]